

## アラスカの夏の俳句 (4)

松井 貴子

### はじめに

19世紀に世界に紹介された日本の俳句は、21世紀の現在、ヨーロッパ、北米から、中国、ブラジルなど、70ヶ国に広がり、世界の俳句愛好者は、200万人に及ぶという。このような状況をふまえて、季節の極になる夏と冬について、極地アラスカの夏とハワイの冬という、当地の気候の対極にある季節を詠んだ俳句に注目して研究を開始した。現地調査を通して、俳句作品を読み解いて、季節を変化によってとらえ得ること、相対的に季節を認識できることを考察した。本稿は「アラスカの夏の俳句」の終稿となる。そして、俳句の国際化に関わる近年の動きについても言及する。日本の俳句界、実作者が活動する俳壇では、依然として、季語や季節感に関わる論説は閉鎖的な傾向が強い。その中で、俳句をユネスコの世界無形文化遺産に登録しようという動きが起こっている。これが、俳壇での季語意識を変化させるまでに至るならば、世界俳句としての季節認識から、地球規模での気候風土を包括した壮大な季語体系を新たに作るという理想に近づくことができるかもしれない。そのときに、アラスカ俳句やハワイ俳句が読み直されるならば、現状では見えていない新たな価値づけをもって受容されるであろう。

### I 翻訳・翻句・評釈

「アラスカ俳句集」は、デイビッド・フープスとダイアナ・ティヨンによって、1972年に刊行された英語俳句集で、夏の章には、五十六の俳句が収録されている。本稿では、「1 時候」「2 天文」「3 雑(無季)」<sup>1</sup>「4 地理①山・水辺」「5 地理②太陽・月と海」<sup>2</sup>「6 動物」「7 植物①草」<sup>3</sup>に続いて、「8 植物②樹木」「9 雑(無季/天文)」<sup>4</sup>「10 動植物」について、翻訳、翻句、評釈を試みる。英語の原句と、その日本語への翻訳、その次に、日本語の

定型に翻案した俳句を記し、評釈を付している。

### 8 植物②樹木

作者の目は、それまで意識を向けていた草から木へと移る。自分一人の手の及ぶ範囲、その場に存在しているものから、再び、広大、雄大な空間、そこに存在している、より大きなものへと、注目が移っている。大海原の上や大空を飛ぶ鳥、自ら動く動物と地表近くに生える草を詠んだ句の連なりに続く木々の句である。ここで作者は、まず、動物が存在しない世界を詠み、大木、古木の存在感を強調している。人間より、はるかに長い寿命(樹齢)を保ってきた樹木たち、はるかな高さや太さのある大木には、アラスカの厳しい気候がもたらす風雪に長く耐えてきた力強い生命力があり、太古につながる原始のエネルギーを持つことを、これらの句は感じさせるのである。

Trees stand mute and tall  
Beneath their shaggy bark  
One hundred years recall.<sup>4</sup>

木々は黙して高く立つ  
荒れた樹皮の下に  
百年の思い出

木々黙し立つ樹皮に百年の追想

平穏ではない人生の苦難の痕跡は、百年分の回想、追憶とともに、そこに内包されている豊かな内実、魂の静謐と崇高さを暗示している。意志を持って生き続けるかに見える木々の様相が擬人化されることによって際立っている。

Trees weep in anguish  
Amber tears of sticky pitch—  
Jewels for tomorrow.<sup>5</sup>

木々が苦しみに泣く  
琥珀の涙のような粘り気のある樹脂  
未来の宝石

琥珀樹脂苦しみの涙宝石に

この句は人生の刻苦と、その先に来る喜びの比喩として読むことができる。若き日の苦勞が、時を経て報われるという人生の変化に重ねることができるであろう。

Standing in the midst  
Of four or five redwood trees:  
Looking up—the sky!<sup>6</sup>

真ん中に立っている  
4、5本のセコイアの木々の  
見上げると、空!

真中立つセコイア四五本見上ぐ空

木から空へ、見上げることで、作者の視界が変わっている。空の発見と世界の広がりである。前の二句では、アラスカの大樹を眺めて、句に詠む対象としていた作者が、寄り集まった木々の真ん中に立って、空を見上げている<sup>7</sup>。大樹に囲まれて、その生命力を感じ、自然の中に存在する人間としての自分を新たに認識して、人間は自然の一部であるという感覚を得たことであろう。日本語で俳句を作ってきた感覚で読むならば、木々が空に向かって伸びる様相を擬人化し、同化して、感覚的に共有することもできるように感じられる。

## 9 雑(無季/天文)

自然現象が内包する意味を見出して、自然物を詠みながら、ものごとの深遠さを短詩によって表現することに、作者は挑戦して、楽しんでいるように見える。寓意を含んだ暗示的な句は、読者に考える

機会を提供し、人生の本質や人間性の真理に迫る哲学的な句は、国や言語を超えて、世界で共有される同質性を持つことが期待できる。

One summer raindrop  
Holds in perfect reflection  
My whole universe.<sup>8</sup>

一滴の夏の雨粒  
寸分変わらず反映して保持する  
私の全世界を

夏雨の一滴に我が全世界

春に動き始めた生命が最高潮に達する夏を、アラスカの夏の雨粒一滴に集約している。夏の雨は天文に分類される季語であるが、その本意を超えて、哲学的な句である。小さなものに大きな世界を見る俳句的感覚がある。アメリカ人には禅的と理解される感覚であろう。日本の古典和歌では、秋の草木に宿る露の一滴に生命の動きを見る。露が散ることが、命が終わることを意味し、命の儂さが露の本意である。冬に向かう秋は、生命が終わる、あるいは、休止する時期で、芽吹きは少し遠い先にある。この句でも、生命活動が季節に重ねて意識されている。小さな水の一滴が、季節を変えることで、新たな本意を得る可能性を示した句である。

Loving is the sun  
In a shadowed world of care—  
Oh cloudless day!<sup>9</sup>

慈愛に満ちているのは太陽  
不安の影に覆われた世界で—  
ああ晴れ渡った日だ!

太陽の慈愛不安の世を晴らす

晴天の太陽は無季であるので、季語のない雑の句となる。温帯から熱帯の地域では、太陽は、日照りから、ときに干ばつの被害をもたらす。亜寒帯

から寒帯、極地では、日照不足から、鬱病を発症したり、サーカディアンリズムが狂って睡眠障害を起こしたりする。赤道から遠ざかるほど、太陽は、生命活動に必要なものとして認識されるのであろう。この句には、太陽を礼賛する思いが感じられる。アラスカでは冬が長く、温帯ならば春になる時期に、まだ冬であり、秋である時期に、もう冬になる。相対的に春秋の短いアラスカでは、四季が、温帯で認識されるような均等ではなく、夏冬の対比がより強く意識されているのかもしれない。

There is no water  
Where it ought to be. Captain's  
Great calamity.<sup>10</sup>

水がない  
あるはずの所に 船長の  
途轍とてつもない苦難

あるはずの水がない船長の大困苦

日本の夏の季語となる水は、梅雨、滝、プールなど、豊かな水量を感じさせるものが多い。高温多湿の環境で多く見られる汗も日本の夏の季語である。大洋での航海中に必要な水が確保できるかどうかは、命にかかわる一大事である。水の貴重さは、陸上で想像する以上のものであろう。船上で水がない苦しみは、夏であるがゆえに、より際立っている。

Nature proves life's curve:  
What was here will be again.  
Pray for time to wait.<sup>11</sup>

森羅万象は生命の循環が真実であることを示す  
この世に存在したものは再び存在するだろう  
時間が止まってほしいと祈る

万物流転時よ止まれと祈りゐる

作者が自然を対象として詠んだ哲学的な句である。自然は神が造ったものだが、自律的に変化して

いってしまう。時間は神が支配するものであり、時間を止めるのが不可能であることがわかっていながら、そうなることを祈っている。造化の変容を受け容れる東洋的、禪的な感覚に対して、変化を止めようとする西洋的、キリスト教的な感覚が抵抗しているように見える。このせめぎあいを超克した先に芭蕉の不易流行があるかもしれない<sup>12</sup>。

## 10 動植物

夏の句の最後は、動きのあるアラスカの自然風景である。動物と植物が動きを持って詠まれている句が連ねられている。アラスカの自然の中で、人間の思いや行動に関わりなく、様々な生命が活動し、共生する様相がとらえられている。これらの句は、同時に、自然現象に仮託して、人間世界を表象する作品として読むこともできる。

In the forest depth,  
The sound of the woodpecker,  
The ring of the ax.<sup>13</sup>

森の奥深くに  
キツツキが立てる音  
斧の響き

森の奥啄木鳥つつく斧響く

キツツキ(啄木鳥)は日本の季語では秋である。啄木鳥が夏のものとして詠まれるのは、アラスカの夏が気候的に日本の秋に相当する時期があるからであろう。鳥と人間が作る森の音が重なり、動物(啄木鳥)と人間の対比、生物(啄木鳥)による音と人工物(斧)による音の対比がある。生物と人間が使う無生物(人工物)が作り出す音の交響は、いずれも木を傷つけている。

A clear waterfall—  
On the widening ripples  
Fall green spruce needles.<sup>14</sup>

濁りのない透明な滝—

小さな波が広がる上に  
唐桧の緑色の針葉が落ちる

滝澄める水紋広がる松落葉

この句には、滝水の降下と松葉の降下、質の違う二つの降下の動きがある。滝は日本の歳時記では夏の季語となる。トウヒ（唐桧）はマツ科の常緑針葉樹で、エゾマツの変種である。松落葉は、初夏に新芽が伸びた後、古葉が落ちるものであることから、夏の季語とする説、雑とする説がある。

Glittering segment,  
A piece of the sunset sky—  
Puddle in a ditch.<sup>15</sup>

きらきら光る切片  
夕焼空の断片—  
水路の淀み

夕焼空きらめく断片水路淀む

淀んだ水路の水面に映っている光は、夕陽の反射である。夕焼が広がる空、その大景から切り取られた小さな切片が、地上に降りて、手の届きそうな近景になっている。作者の目は地上に向けられているが、そこで意識されているのは、手の届かない大きな空と太陽である。天空の大きさと輝きに対比されているのは、地にあるものの小ささと濁りと停滞で、それは、前句に詠まれた滝の清流の動きとも対比される構成になっている。

To summer breezes  
Cotton woods wave green kerchiefs  
And throw yellow ones.<sup>16</sup>

夏のそよ風に  
ポプラが緑色のカチーフを揺り動かす  
そして黄色いカチーフを投げ捨てる

緑布揺る黄布放るポプラ夏風に

ポプラ青葉夏風に揺る黄葉放る

比喩のままの句と比喩を使わない句の両様に翻句を試みた。カチーフは四角形の布を三角に折って頭に被るものである。この句ではポプラの葉の比喩に使われている。ポプラを意味する cotton woods の cotton からの連想であろうか。生命のある青葉は風にそよぎ、生命を終えた葉は黄変して、地面に落ちる。そして、落葉は土に返って養分となる。この句には生命の循環の一樣相が自然現象に重ねて詠まれている。

Humming bird, quickly  
You sip the sweet nectar,  
Then you fly away.<sup>17</sup>

ハチドリは、すばやく  
甘い花蜜を吸う  
そして、飛び去る

蜂鳥は花蜜疾く吸ひて去る

ハチドリ（蜂鳥）は羽音が蜂と同じであるところから名づけられた世界最小の鳥である。ホバリング（空中で停止した状態）しながら、花の中に細長い嘴を差し込んで蜜を吸う。蜂鳥には、他の生物が出す音を模倣して発声を学習する能力があり、多様な鳴き声を持つと言われている。鳥の鳴き声をとらえた日本の季語には、「囀り」という春の季語がある。日本の春はアラスカの夏に重なる。蜂鳥が花蜜を吸うことは、自らの生命を養うことであるが、それを、ごく短時間に行い、蜜を吸う以外の時間を使って、囀るといふ鳥ならではの行為を多彩な音色で行っている様子が連想される。この句も、生命力に満ちた季節を表象している。

The lone kingfisher—  
In the water of the bay  
Fishes swim too deep.<sup>18</sup>

独りぼっちのカワセミ—

湾曲した水の流れに  
魚はあまりにも深く泳ぐ

孤翡翠曲がり川深く魚棲む

カワセミ(翡翠)は雀よりやや大きく嘴が長い。背は光沢のある青緑、腹は赤褐色である。空飛ぶ宝石と呼ばれる。川辺に住み、水に飛び込んで小魚を捕食する。動物の擬人化は、日本の文学作品では児童書、絵本など、子供向けのものに多く見られる。擬人化された動物は必ずしも厳しい環境にはいない。この句では、一羽の翡翠が存在する状況に仮託して、独立して生きることを選択した結果として、日々直面する厳しい現実を提示している。自律的に生きることは、ときに孤立して助けを得られない苦境を招く。この句は、孤高の存在ではあっても、生きることの困難さが増した孤独の時間に思索する人の精神世界を表象している。外の世界とどのように関わり、どう生きるかという哲学的な問いを含んでいる句であると感じられる。

A single white swan,  
Swimming to the distant shore,  
Parts the tundra pond.<sup>19</sup>

一羽の白鳥が  
遠い岸に泳ぎゆき  
ツンドラの小湖を二つに分つ

白鳥一羽ツンドラ小湖分ち行く

前句の孤独に佇む翡翠とは対照的に、自ら行動する白鳥が詠まれている。白鳥は群れを作る渡り鳥であるが、群れを追われたのか、理由があつて群れを離れたのか、明示されていないが、たった一羽で、湖の遠く離れた向こう岸を目指して泳ぎ進んでいる。水面を分けて行くように見える白鳥の動きには、大自然に似つかわしい勇敢さと力強さがある。アラスカは最後のフロンティアと言われた地である。白鳥に仮託した開拓精神の表現が、古き良きアメリカへのノスタルジーを感じさせる。この白鳥もまた孤高の存在としての人間の行動の理想を象徴している

るように見える。

## II 世界遺産としての俳句

能楽や歌舞伎、和食など、すでに登録された21件に続くものとして、俳句をユネスコの世界文化遺産に登録しようという動きが、現在進められている。多くの俳句実作者が所属する四協会(俳人協会、現代俳句協会、日本伝統俳句協会、国際俳句交流協会)が推進し、松尾芭蕉の出身地である三重県伊賀市、「奥の細道」<sup>20</sup>の出発の地である東京都荒川区と結びの地である岐阜県大垣市、正岡子規の出身地である愛媛県松山市など、俳句に深い縁のある自治体も賛同している。

2016年からの動きをまとめると、次のようになる<sup>21</sup>。  
2016年7月 第一回ユネスコ無形文化遺産登録を目指す発起人会(於伊賀市)

2017年1月26日 第二回ユネスコ無形文化遺産登録を目指す発起人会(於内幸町)

日本記者クラブで発起人会の後、記者会見が開かれ、国際俳句交流協会会長有馬朗人により、登録に値する俳句の特質と、その価値について、次のように述べられている。

- 1 俳句は世界一短い定型詩である。
- 2 自然を中心とし、自然の中で共生している人間の生活を詠む詩、自然と共生する文学である。これが、自然を愛し、大切に、温暖化を防ぐことに大きく寄与する。
- 3 自然と共生する短詩であるため、誰でも創作し、鑑賞することができる。日本の俳句から派生した三行詩が世界中に広まり、異なる民族が俳句によって意思疎通することができるようになれば、世界平和につながる。

2017年4月 俳句ユネスコ無形文化遺産登録推進協議会設立

第二回の発起人会で趣旨説明が行われ、俳句の創作鑑賞によって、自然と共生し、身近なものに心を動かすことは日本人の感性と美意識を体現するものであること、俳句を楽しむ習慣は現代人の生活にゆとりと人間らしさと呼び起こすこと、俳句は人類が保全すべき価値を持つものであることから、その必要性を国内外に発信する方法の一つとして、ユネスコ無形文化遺産に登録されるよう取り組む、ということが述べられている。

2017年4月24日 協議会設立総会・記念講演会(於荒川区)

発起人あいさつで有馬朗人は、世界にアピールできる俳句の特質として、世界で一番短い詩形であること、自然と人間の生活を詠むことで自然と共生する文学であること、世界の人々が俳句によって意思疎通ができることを再説している。

記念講演会「俳句の力」の講演者は、金子兜太(現代俳句協会名誉会長)、鷹羽狩行(俳人協会名誉会長)、稲畑汀子(日本伝統俳句協会会長)、宮坂静生(現代俳句協会会長)、有馬朗人(国際俳句交流協会会長)であった。

金子兜太は、近代から現代につながる俳句の特質として、水原秋櫻子が提唱した「自然の真と文芸上の真」を挙げている。俳句では、自然の中に真実と実感があるとされ、自然と深く接することが大切であるとされているが、人間が考え、作り出す世界にも、深い真実があるという考え方である。

日常生活が都市化され、自然から遠ざかったために、人間社会に目が向けられるのである。自然だけを見るのではなく、伝統的なやり方に固執することなく、自然も人間も、創作の対象とするという柔軟な態度を持つことは、世界俳句を推進するために必要なことである。

鷹羽狩行は、俳句の力として次の3点を挙げている。

- 1 日常生活に潤いや安らぎを与え、人生に希望を与えることができ、現在のような高齢化社会では、生きる力を与えてくれる。
- 2 俳句には、瞬間を永遠のものにする深い働きがあり、現在だけでなく、過去も映し出すことができる。
- 3 俳句は、時代によって、人によって、幅広い解釈が可能であり、絶えず複数の解釈を生み出す。

ユネスコの無形文化遺産に登録されることで、日本の俳句は、日本国内にとどまらないで、世界の俳句となることを意図している。世界俳句は世界平和に寄与することを、その存在価値としている。ここに挙げられた俳句の特質は、広く外国人に受け入れられるならば、いずれも、日本の俳句が世界俳句となって、平和のために貢献できるものであろう。

稲畑汀子は、日本人と外国人の季語に対する考

え方の違いを挙げ、国により季節の移り行く姿はそれぞれ違うと認めた上で、自然を大切にしようという心はみんな同じであると発言している。そして、ここから、自然を大切にしようという俳句の力を発揮できるとしている。

稲畑は、季語を重視し、日本の季語が、そのままに世界に広がることを求めた高浜虚子の系譜を最も強く引き継ぎながら、気候風土の異なる国、地域が存在する地球上で、季節感をどのように共有するかという課題を解決する方策を模索している。俳句において最も重要なポイントである季節感について、日本と外国で異なっていることを認めた、その上に、同じであるもの、共有できるものがあり、そこに意を向けることができると提案している。

宮坂静生は、モチベーションを持つこと、生きる上での問題意識を持つことが、幸福感をもたらすと、南米のウルグアイ大統領が語ったことを、俳句に重ねている。俳人は、俳句創作がモチベーションとなり、問題意識となって、幸福感を得ることができる。ここに、世界につながる俳句の存在価値を見出している。また、金子みすずの詩を例示しながら、俳句の原点を、すべてのものに靈魂の存在を感知するアニミズムと、素朴な感動を表現することにあるとし、これが世界的広がりを持って、平和について考える機会となることを期待している。

有馬朗人は、芭蕉の影響を受けたアメリカの現代詩人がイマジズム運動を起こし、短い3行詩を書いていたことを挙げ、日本の俳句の有季定型を、世界俳句では自然を入れた3行詩でよいとしている。それによって、自然中心の短詩として遺産登録をめざすことが企図されている。日本人は自然に対して、愛好と畏怖の気持ちを持って、自然と共生する喜びを俳句に詠む。詩型の短さゆえに、辞書を引けば外国語でも、容易に内容を理解できる俳句に、世界の人々が、それぞれに喜びや悲しみを詠み、互いに理解し合うことができるという期待の土台には、人間は共通の感情を持っているという考えがある。有馬が進める俳句の文化遺産化には、平和運動という大きな柱がある。

この動きに重ねた講演、シンポジウムも報告されている。

俳句の文化遺産化を進める俳句団体の一つ、現代俳句協会が語ったヘルマン・ファン＝ロンパイは、

現代の世界を不安と不確定に満ちたものにとらえ、人々は心の平安を求めていると考えている。社会と自分との距離を保つことが、心の平安を得るために必要なことであり、仏教やキリスト教は、そのような生き方を推奨している。それと同じ精神が俳句にあると述べている。俳人は創作のために観察をする。その態度が客観的視点を持ち続けることを可能にするため、社会の動きの中で自己を失わないでいられるのである。

ファン＝ロンパイが EU 理事会議長（大統領）であったとき、ノーベル平和賞を受賞した折に、依頼されて、次のような俳句を詠んでいる<sup>22</sup>。

After war came peace  
Fulfilling the oldest wish:  
Nobel's dream comes true

戦争から平和へ  
古くからの望み—  
ノーベルの夢

Who looks at the sun,  
at the sea, at the stars  
loves peace

陽を海を  
星を見るもの  
和を愛す

Friendship miracle  
A rising sun, shining stars  
in the same blue sky

友情という奇跡  
同じ空に  
日は昇り星光る

受賞の記念に、平和への思いと日本と EU の友好について詠んだという。俳句が世界平和に貢献することを期待しているのである。

スウェーデンと日本の外交関係樹立 150 周年を記念して、国際交流基金、国際俳句交流協会、スウェーデン俳句協会の共催により、二つのシンポジ

ウムが開催された。「世界の俳句の今」(2018年6月26日 東洋博物館／ストックホルム市シェップスホルメン島) と、「俳句とは何か」(2018年6月27日 ヴァレンツナ文化センター／ヴァレンツナ市) で、ラーシュ・ヴァリエ (前駐日スウェーデン大使)、有馬朗人 (国際俳句交流協会会長)、ヘルマン・ファン＝ロンパイ (日欧俳句交流大使)、ウィリー・ヴァンデワラ (ベルギー俳句センター会長) が登壇した。

「世界の俳句の今」では、日本の俳句の歴史に始まり、スウェーデンや他の外国への俳句の広がりが語られ、スウェーデン俳人の作品紹介、初等教育に俳句が導入された成果として創作された子供俳句の表彰、ストックホルム地中海博物館で月に一度開かれる俳句ワークショップの報告などがなされた。

「俳句とは何か」では、西洋詩と俳句を比較して、俳句の特質が次のように語られた。

西洋の詩作は、個人的で、孤独なものである。作品を読み解くには、作者の世界観に入り込む努力をしなければならない。それに対して、俳句はもともと座の文芸であり、季語を共通項として、創作、鑑賞することができる集団文芸である。個々の俳句作品には、詩のような題がつけられていない。これにより、ヒントなしに直感的に作品そのものを理解することになる。俳句の形式はシンプルで短いため、多くの人に広まったが、同じヨーロッパ内であっても、例えばスウェーデンとオーストリアでは季語のイメージや解釈が異なる。季語をキーワードとして作者の意図をつかむ俳句では、一つの作品に複数の解釈があってもよい<sup>23</sup>。

このような世界に向けての動きに対して、一方では、日本国内の俳句実作者から、次のような否定的な反応が出ている。こちらの方が、多くの一般的な実作者の本音を代弁しているのかもしれない。

「自然を詠む」ことが中心となっているが、自分は自然ではなく人間を詠みたい。自由なテーマがよい。季語を大事にして推進されているが、無季俳句はどうするのか。無季俳句を世界へどうアピールするのかは、難しい問題である。

ユネスコに登録される文化遺産は、文化庁によれば、「このままでは消滅するかもしれないも

のに光を当て、守るのが本来の趣旨」とあり、俳句は滅びるものなのか。俳句は伝統的な文芸であると同時に先鋭的なアートでもある。和食や能、歌舞伎、祭りとは異なる。俳句を趣味とする人、自己表現の手段とする人、前衛的なものとして考える人、様々な立場があり、それらが分断されることが懸念される<sup>24</sup>。

これまでの俳壇の安定した状態を揺るがされる不安から出ていると思われるが、多分に主観的な誤解が含まれている。「自然」には、人間と対立するものとしてとらえる西洋的な自然と、人間もその一部とする東洋的な自然があり、近代以降の日本では、この二つが混在している<sup>25</sup>。今回の推進運動では、西洋的な自然観に依っているわけではなく、また、日本で行われている兼題のようにテーマを限定して句を詠むことは特に推奨されていない。季語は、自然から作られてきたものであるが、自然＝季語ではない。無季俳句には、季語の縛りが無いが、詩語としての季語の力を得ることもない。無季俳句こそ、俳句の本質を体現していないと、詩としての俳句作品にならないのである。日本と外国で、簡単には共有できない季語を使わないという無季俳句の特徴は、有季俳句よりも、容易に世界に受け入れられるものになるかもしれない可能性を持つ利点であろう。

俳句実作者が作品を発表し、批評などの言論を交わす場である俳壇では、季語に関する議論、論争は尽きない。

次に見られるように、歴史性や国際化という視点を持ちつつも、結局は、季語は俳句に必須で重要なものと結論づけられることが多く繰り返されている<sup>26</sup>。

高柳 俳句評論では、季語や切字のような俳句の本質については、考えるべきテーマが時代ごとにある。

角谷 宮坂静生が提唱した「地貌季語」は、各地の文化的、民俗学的に重要だが消滅の危機にある言葉を発掘したもので、季語とは何かという本質的なところを問いかけている

小林 地貌季語には、俳句の国際化に貢献する普遍性がある。

角谷 俳句の国際化にあたって、日本の季語は難しいところがある。あるベルギー俳人は「滝」を夏の季語とすることが、滝の本質を考える自分の想像の邪魔になると、日本の季語意識を否定した。日本の季語は歴史的に変化している。その変遷を見直すことが必要である。

小林 季語は一番大きな問題である。

そして、この十年ほどを見ても、季語について、日本の俳人の感覚に、いまだに排他的な面があることは否めない<sup>27</sup>。実作にかかわる季語について語るとき、日本国外での季語が考え合わされるのは、特別な場合に限定されている。日本の気候と異なる外国の季語を、日本発祥である俳句の季語として認めることに抵抗を感じるのは多くの俳人の素朴な本音であろう。個人の創作経験に依拠して季語を語る言葉は、主観的であったり、比喩的であったり、確かな定義づけのないままに使われ続けている表現であったりしている。俳句では、実作者であると同時に評論家でもあることができる。個人的な主観や曖昧さを含む評論では、議論の停滞を招きかねない。

このような俳句実作者たちの動きに対して、俳句の学術研究を行う俳文学会は、古典俳句（連歌、俳諧）の位置付けが不十分であるなどの理由で、この動きに対しては消極的である<sup>28</sup>。

詩型の短い俳句では、読者ごとに、解釈が異なることが日常的に起こり得る。アラスカを詠んだ英語俳句を、アメリカ英語を第一言語とせず、アメリカ文学の専門ではない日本語母語話者が評釈するということは、文化背景を異にする文学を理解しようとすることである。これは、日本語を第一言語とせず、日本文学を専門に学んでいない外国人が、日本語の俳句を理解しようすることに重なる。このようにときに生じる誤解をどう扱うかは、一国の文化の国際化において重要な点である。俳句の場合には、誤解として一蹴するのではなく、解釈の多様性と、とらえ得る可能性がある。そうして、相互理解を模索する場を提供することができれば、俳句の存在価値は高まるであろう。

ユネスコの文化遺産として、先に登録された和食では、「遺産」として登録されることは、滅びるものと認定されることであるという見方も認識された



上で、遺産登録が推進されたようであるが、和食料理人は、和食が減びるままに任せることは全く考えていない。スーパー歌舞伎、英語能を含む新作能、バレエと能のコラボレーションなどは、伝統芸能での前衛的な動きである。和食でも、伝統芸能でも、プロフェッショナルから素人まで、それぞれの立場と価値観で、提供し、享受している。それが、俳句と大きく異なっているとは思われない。俳句でも、俳人が同様に行動することは可能であろう。

俳句だけのことを考えるのではなく、俳句以外の文化現象、他分野との相互理解、互いの異質性と同質性を尊重し、共生への方途を探ることができるのであれば、俳句は文化遺産として登録される価値を真に持つことができるかもしれない。

### おわりに

「アラスカ俳句」の刊行から五十年近く経つ間に、俳句創作は、アメリカの学校教育に取り入れられ、研究対象となった。日本語と異なる言語による俳句創作では、日本語の十七文字や十七音(シラブル)、縦書きの一行詩というルールは適用できない。ゆえに、横書き、三行書きが外国語俳句の形式として認知された。五七五に代わる形式についての合意は、まだ得られていないが、それぞれの俳句実作者たちの感覚に基いて、短詩として適切な長さにすることが模索されている。日本の俳句界で、俳句の国際化がブームのように議論されてからは三十年ほどになる。この間、季語について、季節感をどのように共有するのか、議論されたが、その有効な方策は見出されていない。

日本の伝統的な季節感、和歌などの古典文学に表現されたもので、実感を離れて作られた感覚である。この文学的季節感を、日本語を解さない外国人が理解することは難しい。これが、日本文化は独特であるというイメージを作った一因である。「日本人は季節感が豊かである」という定義には、「日本人だけが」というニュアンスが見え隠れする。日本以外でも、例えば、農業に従事する人々は季節変化を意識して暮らしている。都市でも、生活の中で体感できる季節変化、そこから得られる季節意識は共有できるはずである。実感に基づいた季節感を詠む俳句が日本から世界に広がり、日本と同じ北半球の温帯にあるヨーロッパ各地、ア

メリカ本土だけでなく、ハワイ、アラスカ、南半球のブラジルでも、当地の自然と季節が俳句に詠まれている。数十年にわたる、このような事実がある上でも、日本の俳句界では、外国の季語について懐疑的な議論が続いている。自文化の伝統であり、その特質を形成していると考えられているものを、他文化との共生の場に置くことは難しいのであろう。日本の自然観には、中国とヨーロッパの自然観が混在しているという。その特質を自覚的に活かすならば、世界の自然現象に基づく季節意識をつなぐ役割を果たせるかもしれない。

日本の季語が規定する季節感では、時間軸上の特定の点や線に季語が位置される。日本という一地域に限定されるため、暦の上で定められる一時点あるいは一定期間になる。外国俳句を視野に入れるとき、対象となる地域は世界各地に広がり、気候風土の異なる複数の地域で、同じ時間を共有することになる。同時に複数の季節感を認識すること、地球上には異なる季節が併存していることを実感としてつかむことが、日本の俳人には難しいのであろう。日本の季節感として、学んで身につけたものを、能動的な必要性なしに、世界俳句の季節感に置き換えることは容易ではない。この困難さをどう扱うかは真の国際化、真のグローバル化とは何かを考える課題となるであろう。俳句創作の言語形式が日本語と他言語で併存しているように、季節意識も併存できるようにするには、外国俳句の季節感を否定的にとらえることを、ひとまず停止することが必要である。そして、日常生活での実感に基く個人的な季節意識、一定の集団内で共有される季節意識、伝統に裏打ちされた文学的季語のように、季節感を質的に分けてとらえることで、日本の季語が規定する季節感の絶対的な存在感を相対化し、許容度と多様性のある季節感、季語意識を作ることが有効であろう。日本の俳句を世界の俳句にすることが、本当に望まれることであるならば、このような動きが起こってくるかもしれない。

<sup>1</sup> 松井貴子 (2012) 「アラスカの夏の俳句 (1)」。

<sup>2</sup> 松井貴子 (2013) 「アラスカの夏の俳句 (2)」。

<sup>3</sup> 松井貴子 (2017) 「アラスカの夏の俳句 (3)」。

<sup>4</sup> Hoopes, Tillion(1972),p.42.

<sup>5</sup> Hoopes, Tillion(1972),p.42.

<sup>6</sup> Hoopes, Tillion(1972),p.43.

<sup>7</sup> イギリス詩人ジェイムズ・カーカップ(1918-2009)によれば、

- 先史時代から、人間には原始的な樹木信仰があり、大樹の間にいると、人間がごく小さな存在であると感じられてきて、木々の枝葉のざわめきに、樹木の魂の存在が感知されるといふ。(Kirkup(1987) “Trees”.)
- <sup>8</sup> Hoopes. Tillion(1972),p.44.
- <sup>9</sup> Hoopes. Tillion(1972),p.44.
- <sup>10</sup> Hoopes. Tillion(1972),p.44.
- <sup>11</sup> Hoopes. Tillion(1972),p.44.
- <sup>12</sup> この句の解釈については米山正文氏にご教示を頂きました。
- <sup>13</sup> Hoopes. Tillion(1972),p.45.
- <sup>14</sup> Hoopes. Tillion(1972),p.45.
- <sup>15</sup> Hoopes. Tillion(1972),p.46.
- <sup>16</sup> Hoopes. Tillion(1972),p.46.
- <sup>17</sup> Hoopes. Tillion(1972),p.47.
- <sup>18</sup> Hoopes. Tillion(1972),p.47.
- <sup>19</sup> Hoopes. Tillion(1972),p.47.
- <sup>20</sup> 「俳句ユネスコ無形文化遺産登録推進協議会」に加入する自治体は30に上り、芭蕉翁「おくのほそ道」ネットワーク(NPO)、芭蕉翁顕彰会(公益財団法人)も加入している。他に、「俳句のユネスコ無形文化遺産への登録を目指す議員連盟」がある。
- <sup>21</sup> 有馬朗人(2017)「俳句のユネスコ無形文化遺産登録を目指して」2-3頁。  
「主要各紙の記事(いずれも1月27日付朝刊)4-5頁。  
染谷秀雄(2017)「『俳句』をユネスコ無形文化遺産に登録へ」2面。  
「俳句ユネスコ無形文化遺産登録推進協議会設立総会報告」(2017)2-3、16-21頁。  
「記念講演会「俳句の力」講演要旨」(2017)4-15頁。  
上谷昌憲(2017)「言葉の壁を越えて—俳句をユネスコ無形文化遺産に」1面。  
福永法弘(2017)「世界平和に貢献できる詩形」1面。
- <sup>22</sup> ファン＝ロンバイ(2018)「【特別寄稿】世界はなぜ俳句を求めるのか」2-7頁。(俳句は木村聡雄訳)
- <sup>23</sup> 内村恭子「シンポジウム「世界の俳句の今」「俳句とは何か」(スウェーデン・日本外交関係樹立百五十周年記念)44-47頁。
- <sup>24</sup> 角谷昌子・小林貴子・高柳克弘(2008)「鼎談 2017年注目の俳人—俳壇展望／「ユネスコ無形文化遺産」登録推進への賛否」31-33頁。
- <sup>25</sup> 伊東(1999)『一語の辞典 自然』115頁。
- <sup>26</sup> 角谷昌子・小林貴子・高柳克弘「鼎談 2017年注目の俳人—俳壇展望／俳句評論のいま」38-41頁。
- <sup>27</sup> 「特集 季語をどう詠んできたか」(2009)。  
「季語をテーマに 第43回関西俳句講座」(2013)。  
「基本テーマは<季語> 第44回関西俳句講座」(2014)。  
「<季語>あれこれ 第46回関西俳句講座」(2016)。  
「季語の核心に触れる 第47回関西俳句講座」(2017)。  
「季語の力で今の自分を詠む／第24回俳句大賞選考会」(2017)。  
「食欲の秋、味覚と視覚で楽しむ」(2018)。
- <sup>28</sup> 伊賀市の、「『俳句』のユネスコ無形遺産登録推進事業」について、俳文学会として賛同することを表明しているが、次のような意見が付帯されている。

推進事業の意義については、「俳句」が登録されることで、どのようなことが可能になってくるのか?俳句がグローバルに認知されることで、どのような「俳句」の未来

があるのか不明確なため事業の意義がわからない。事業の中心を「俳句」と限定することについては、日本が世界に誇るべきものは「俳句」ではなく「(連歌)俳諧」という文芸形態であり、その背景をなす日本文化の特質である。「座の文芸(二人以上の人間が集って心を開き合う文芸)」であることを、もっと世界に発信すべきである。(『連歌俳諧研究』132号、73-74頁)。

## 参考文献

- 松井貴子(2011)「アラスカ俳句のためのノート」『外国文学』60号、67-81頁。
- 松井貴子(2012)「アラスカの夏の俳句(1)」『宇都宮大学国際学部論集』34号、83-88頁。
- 松井貴子(2013)「アラスカの夏の俳句(2)」『宇都宮大学国際学部論集』35号、1-8頁。
- 松井貴子(2017)「アラスカの夏の俳句(3)」『宇都宮大学国際学部論集』43号、83-89頁。
- 松井貴子(2010)「ハワイ俳句のためのノート」『外国文学』59号、75-84頁。
- 松井貴子(2012)「ハワイの冬の俳句」『宇都宮大学国際学部研究論集』33号、47-53頁。
- 松井貴子(2007)「『俳句』試訳—アメリカ発俳句入門(1)」『外国文学』56号、197-201頁。
- 松井貴子(2012)「『俳句』試訳—アメリカ発俳句入門(2)」『外国文学』61号、109-111頁。
- 松井貴子(2013)「『俳句』試訳—アメリカ発俳句入門(3)」『外国文学』62号、131-134頁。
- 松井貴子(2018)「日本で考える多文化共生—多文化の現実、共生の理想」『多文化共生をどう捉えるか』(下野新聞新書12) 宇都宮大学国際学部編 下野新聞社 52-57頁。
- 『連歌俳諧研究』(2017)132号 俳文学会 73-74頁。
- 「特集 季語をどう詠んできたか」(2009)『俳句』6月号 角川学芸出版 64-69頁。
- 「季語をテーマに 第43回関西俳句講座」(2013)『俳句文学館』511号 俳人協会 4-5面。
- 「基本テーマは<季語> 第44回関西俳句講座」(2014)『俳句文学館』523号 俳人協会 4-5面。
- 「<季語>あれこれ 第46回関西俳句講座」(2016)『俳句文学館』547号 俳人協会 4-5面。
- 「季語の核心に触れる 第47回関西俳句講座」(2017)『俳句文学館』559号 俳人協会 4

- 5 面。  
 「季語の力で今の自分を詠む／第 24 回俳句大賞選考会」(2017)『俳句文学館』560 号 俳人協会 3 面。  
 「食欲の秋、味覚と視覚で楽しむ」(2018)『俳句文学館』570 号 俳人協会 4 - 5 面。  
 「季語が共通テーマ 第 48 回関西俳句講座」(2018)『俳句文学館』571 号 俳人協会 4 - 5 面。  
 有馬朗人(2017)「俳句のユネスコ無形文化遺産登録を目指して」『HI』(Haiku International) 129 号 国際俳句交流協会 2 - 3 頁。  
 「主要各紙の記事(いずれも 1 月 27 日付朝刊)」(「朝日新聞」「読売新聞」「毎日新聞」の関連新聞記事転載)(2017)『HI』(Haiku International) 129 号 国際俳句交流協会 4 - 5 頁。  
 染谷秀雄(2017)「「俳句」をユネスコ無形文化遺産に登録へ」『俳句文学館』552 号 俳人協会 2 面。  
 「俳句ユネスコ無形文化遺産登録推進協議会設立総会 報告」(2017)『HI』(Haiku International) 130 号 国際俳句交流協会 2 - 3、16 - 21 頁。  
 「記念講演会「俳句の力」講演要旨」(2017)『HI』(Haiku International) 130 号 国際俳句交流協会 4 - 15 頁。  
 上谷昌憲(2017)「言葉の壁を越えて一俳句をユネスコ無形文化遺産に」『俳句文学館』554 号 俳人協会 1 面。  
 福永法弘(2017)「世界平和に貢献できる詩形」『俳句文学館』554 号 俳人協会 1 面。  
 角谷昌子・小林貴子・高柳克弘(2018)「鼎談 2017 年注目の俳人一俳壇展望／「ユネスコ無形文化遺産」登録推進への賛否」『俳壇年鑑 二〇一八年版』本阿弥書店 31 - 33 頁。  
 角谷昌子・小林貴子・高柳克弘(2008)「鼎談 2017 年注目の俳人一俳壇展望／「鼎談 2017 年注目の俳人一俳壇展望／俳句評論のいま」『俳壇年鑑 二〇一八年版』本阿弥書店 38 - 41 頁。  
 ヘルマン・ファン＝ロンパイ(2018)「【特別寄稿】世界はなぜ俳句を求めるのか」『HI』(Haiku

International) 136 号 2 - 7 頁。(「現代俳句」2017・11(現代俳句協会創立 70 周年記念特大号)より転載)

内村恭子(2018)「シンポジウム「世界の俳句の今」「俳句とは何か」(スウェーデン・日本外交関係樹立百五十周年記念)『天為』10月号 44 - 47 頁。  
 伊東俊太郎(1999)『一語の辞典 自然』三省堂 115 頁。

近藤焦肝(近藤正)(2014)『世界へ飛んだ蛙：芭蕉から地球俳句へ The Frog's Jumped to the World: From Basho to Earth Haiku』里文出版。

## References

- Anderson, Jim (2004) *Fall: Seasons in the Home*, Creative Home Arts Club.  
 Blodgett, Bonnie (2004) *Summer: Seasons in the Home*, Creative Home Arts Club.  
 Chandoha, Walter (2004) *Winter: Seasons in the Home*, Creative Home Arts Club.  
 Evans, Mary (2004) *Spring: Seasons in the Home*, Creative Home Arts Club.  
 Hoopes, David. Tillion, Diana (1972) *Alaska in Haiku*, Charles E. Tuttle Company.  
 Pelusey, Michael and Jane (2007) *Spring: The Seasons*, Macmillan Education Australia.  
 Pelusey, Michael and Jane (2007) *Summer: The seasons*, Macmillan Education Australia.  
 Pelusey, Michael and Jane (2007) *Autumn: The Seasons*, Macmillan Education Australia.  
 Pelusey, Michael and Jane (2007) *Winter: The Seasons*, Macmillan Education Australia.  
 Prisant, Kathleen (2004) *The Holiday Table: Crafts & Cuisine*, Creative Home Arts Club.  
 Ross, Bruce ed. (1993) *Haiku Moment: An Anthology of Contemporary North American Haiku*, Charles E. Tuttle Company.  
 Kirkup, James., (1987) "Trees" in *The Mystery and Magic of Symbols*, Tokyo: Seibido, pp.34-42.

本研究は、平成 21-24 年度科学研究費補助金(基盤研究 C)「季節感、季節認識に関する比較文化研究—俳句の国際化を視座として」について考察を継続したものである。

## Summer Alaska in Haiku (4)

MATSUI Takako

### Abstract

This paper continues ‘Summer Alaska in Haiku(1)’, ‘Summer Alaska in Haiku(2)’ and ‘Summer Alaska in Haiku(3)’.

The most prominent feature of summer is the heat. Summer is hotter than any other season. At the same time, summer is dry or wet in some regions of the world. For example, since Japan is situated in a temperate zone in East Asia, people often feel high temperature and humidity especially in early summer, during the rainy season.

Summer occurs, however, not only in the temperate and tropical zones but also in the polar zones such as Alaska, where there is a rhythm to the seasons, as well. The sun becomes strong so plants grow very well and people and animals are active during the summer even in Alaska.

D. Hoops and D. Tillion composed four-seasons haiku in Alaska and their haiku were published in *Alaska in Haiku* in 1972. They subtly perceived Alaskan seasonal changes all year round and vividly described nature at any season with their lively inspired seasonal feelings.

The summer haiku in their haiku collection seems to have imitated the form of Japanese *saijiki*, a catalog of season-specific words used in composing haiku. Japanese *saijiki* usually consists of the categories of 1) seasons, 2) heavens, 3) earth, 4) humanity, 5) observances, 6) animals and 7) plants. This classification was formally adopted as English *saijiki* in *Haiku World: An International Poetry Almanac* by W. J. Higginson in 1996.

Hoops who composed the majority of the haiku published in *Alaska in Haiku* showed his specialty as a fishery research biologist in those haiku. In addition, he seems to have been interested in things human and included some philosophical haiku as well.

In recent years, Japanese leading haiku poets expect Japanese haiku will be registered as UNESCO’s Intangible Cultural Heritage and contribute to world peace. I hope *Alaska in Haiku* will be looked at with fresh eyes.

(2018年11月1日受理)